

古畑直定朗



ある俳優の憂鬱

4

病院の裏で

「えー、古畠です。次の物語は、実は、私があまり必要とされなかつた事件なのです。なので、特にお話しすることは、ありません。一つだけ、言える事は、持つべきものは、部下・・・では無いということです。はい。へへへ。」

午後9:00。古畠がいる(第3巻参照)帝都大学付属病院のすぐ隣にある、帝都大学競技場のトレーニングルーム。一人の男が電気をつけた。

「おーい、松田？いるのかー？」

トレーニングルームは、しんと静まり返っていた。

「せっかく、時間通りに来てやつたのに。先輩を待たせるとは良い御身分だ事。」

すると、足音がする。

「高田先輩。お待たせしました。すいません。」

「おせーよ。先輩待たせるなんて。良いご身分だな。」

「すいません。」

「で、用件は何なんだよ？」

「実は、今度の大学対抗試合に、是非、出場させていただきたくて。」

「そりや、無理だな。お前の出る枠なんか、ねーよ。」

「しかし。」

「お前は、能力ねえーし。絶対、無理だよ。」

「・・・じゃあ、やっぱり、1人、減らせば出られますよね。」

「ハハハ！何言ってんだよ。」

松田は、思いっきり、鉄アレイで、高田を殴り倒した。

「ふざけるな。こいつのせいで・・・」

「はい！カット！OKです!!」

一斉に、周りの電気がついた。

「いやー、なかなか良いシーンでしたぁ!!というわけで、以上を持って、アメフト部殺人事件ファイルその9～再びの惨劇への撮影を終わりまぁーす!!

高田先輩役の石田さんでしたー。」

「お疲れ様でしたー。」

「そして、松田役の芝 知晴さんでしたー!!」

「あっ、お疲れ様でした。」

この日、帝大競技場では、東都テレビの人気ドラマシリーズ「アメフト部殺人事件ファイル」の撮影が行われていた。人気俳優の芝知晴は、今回、犯人役として、特別出演していた。

「芝さん！」

ディレクターの岡島に知晴は、呼ばれた。

「はい？」

「監督の松枝さんが、呼んでます。」

「あっそう。」

知晴は、松枝監督の元へ向かった。松枝監督こと、松枝由香は、石田の妻である。

「何すか？」

「知君、この後の今日の予定は？」

「あー、家に帰るだけだけど。」

「あっ、そう。じゃあ、この後、ちょっと付き合ってよ。」

「ああ、いいけど。」

そして、知晴は、着替えるために、更衣室へ向かった。そして、知晴は、かばんの中から、包丁を取り出した。そして、それを確認すると、再び、バックへと包丁を戻した。そして、隣の部屋へと向かった。

「おう、知晴君。どうしたの？」

「うん。この間の話なんだけどさ。」

「この間の話？あー、松枝監督と別れて欲しい話？」

「うん。」

「やっぱり、無理だよ。僕にも、好きな気持ちがあるからね。」

そして、石田が知晴に背を向けた瞬間、知晴は、一気に包丁で刺した。

「ちょ・・・ちょっと冗談だ・・・ろ・・・。」

石田は、息絶えた。

「冗談じゃねえよ。本気だよ。」

知晴は、すぐに、外に出ようとした。しかし、外に、ディレクター達の声が聞こえてきた。

「じゃあ、石田さん、誘ってきます！！」

知晴は、冷や汗をかいた。外に出られなくなってしまった。しかも、このままじゃ、見つかってしまう。咄嗟に、近くにあった石田の衣装を来た。そして、小道具である拳銃を持ち、サングラスをかけた。そして、石田の遺体を隠した。

「失礼しまーす。あっ、石田さん！これから、飲みに行くんですが、行きますか？」

「あっ、うん。」

「ハハハ。どうしたんですか？その恰好？僕たちを驚かせようとしたんですか？」

「あっ、いや・・・。」

「とりあえず、正面玄関で待ってます！じゃあ。」

なんとか、ばれなかつたようだった。知晴は、安心して、廊下から、声が聞こえなくなったのを確認して外へ出た。

やってきたのは・・・

午後10:00。警視庁の車が到着した。

「警視庁の泉舞です。」

「ディレクターの岡崎と申します。こちらです。」

泉舞は、現場へと向かった。

「ああ、岡崎さんね。ってかさ、杉嶋君、古畠さん、どうしたの？」

「なんか、帝大病院に、さっきの事件の被害者の水野さんの容態を見に行きましたよ。」

「そうなんだ。じゃ、ここは、僕が、解決しなきゃな。ハハハ。」

「いやー、やっぱり、古畠さんを待った方がよろしいのでは？」

「何それ、僕の事、信用してないの？」

「いえ、そーいう意味ではないのですが・・・。」

「とりあえず、事情聴取しようよ。」

泉舞は、かばんから、ボイスレコーダーを取り出した。

「泉舞さん、何ですか？それ？」

「あー、コレ？ボイスレコーダー。僕さ、よく、人の話、聞き逃しちゃうから、聞き直せるように、買ったんだ。ハハハ。」

「へえ。」

杉嶋は、あまり、興味なさそうに、現場へと戻っていった。

泉舞は、とりあえず、事情聴取を始めた。たまたま、近くにいた男に話しかけた。

「あー、すいません。警察です。はい。えーと、まず、お名前は？」

「はあ？ってか何？殺人事件でもあったわけ？」

「よくご存じで。その通り。殺人です。あっ、僕、担当の泉舞と申します。」

「マジで？大変だね。俺は、芝知晴。このドラマの犯人役。」

「あー、ドラマの撮影なんですね。で、知晴さんは、事件のあった時、何を？」

「あー、着替えてましたよ。」

「そーですか。なんか、物音とか、聞きました？」

「いやー、特に聞きませんでしたけどね。」

「そーですか。じゃあ、また何か気づいたこととかありましたら、教えてください。」

「わかりました。あっ、でも、この後、用事あるんで。」

「あっ、そーですか。まあ、もう大丈夫だと思いますので。ハハハ。」

「そーですか。ありがとうございます。」

芝知晴は、来た方向と逆の方向に帰って行った。

そのあとも、泉舞は、何人かに聞いて回った。そして、杉嶋がやってきた。

「泉舞さん、奥様がお話出来る状況になりましたよ。」

「奥さん？」

「えっ？泉舞さん、今まで何してたんすか？」

「聞き込み。」

「普通、奥さんに一番最初に話聞くでしょー。今回のドラマの監督さん、松枝由香さんが、殺された石田さんの奥さんですよ。」

「あっ、そーなの。じゃ、行くよ。」

杉嶋と、泉舞は、松枝の元へと向かった。

「警視庁の杉嶋と申します。松枝さん、今回の事は、お察しします。」

「刑事さん、犯人は、わかったんですか？」

「いえ、まだ。」

「早く、見つけてください。ほんと、ほんと・・・。」

松枝は、また泣き始めた。そして、泉舞が、

「奥さん、あなた、旦那さんと何か問題ありましたね？」

「・・・はあ？」

「たぶん、恋愛のもつれ。」

「・・・はあ？あの、刑事さん、馬鹿にしてます？」

「いえ。」

「ふざけないでください!!こんな時に!!私が、殺したとでも言うんですか?!ふざけないで!!」

杉嶋が謝りながら、泉舞と共に、部屋を出た。

「泉舞さん！！！なんて事してくれたんですか!!」

「だって、普通、刑事ドラマとかだと、まず、奥さんを疑うでしょ？」

「これは、ドラマじゃなくて、実際の殺人事件ですよ！！もー！！」

「なんだよ。部下のくせに。」

「先輩だからって、こんな事、普通、考えられませんよ!!」

杉嶋は、再び、松枝の部屋に入っていった。そして、泉舞は、取り残された。そんな時、電話が鳴った。

「あー、古畠さん。どうしたんですか?はい?帝大病院?あー、わかりました。今行きます。」

古畠に呼び出され、泉舞は、すぐ隣にある帝大病院へ向かった。

「古畠さん、こっちでも事件だそうで？」

「あっちは、どうなの？」

「それが、さっぱり。」

「あーそう。で、泉舞君さ、こっから、南病棟の裏の犯行現場まで、走って行って。」

「はあ？！無理だし!!」

「行け!!DIE!!」

そして、泉舞は、走り出した。泉舞は、なんで、走っているのか、まったくわからなかった。

そして、はあはあ言いながら、古畠に電話をかけた。

「古畠さん、はあはあ、つきました。はあはあ、南病棟の裏の犯行現場に。」

「何分？」

「6分21秒です。」

「あーそう。ありがとう。」

あっという間に、電話が切れた。そして、泉舞は、再び、帝大競技場へと戻っていった。杉嶋がやってきた。

「あー泉舞さん、どこ行ってたんすか?」

「うん、ちょっとね。ハハハ。」

「ハハハじゃないですよー。」

「で、解決したの?」

「するわけないじゃないですか!! ドラマに出演してた人達、みんな帰っちゃいましたよ!!」

「どーしよ。ね。ハハハ。」

泉舞と、杉嶋は、何も出来ないまま、ただ、時間が過ぎていくだけだった。

午前2:00。辺りは、シーンと静まり返っていた。

ただ、事件現場だけが、煌々と電気がついていた。

「どーもー。」

「あっ。古畠さん。あっちの事件は、大丈夫だったんですか?」

「うん。まあね。解決したよ。事件は、DIE?な感じ?」

「意味わかんないですけど。」

「泉舞君は?」

「全然、うまくいかなくて、あそこで寝てます。」

「うーん、だめだねえ。」

古畠が、泉舞のそばへと向かうと、泉舞のポケットから、何かが落ちていた。

「ん?」

拾うと、それは、ボイスレコーダーだった。古畠は、スイッチを入れて、聞いてみる。最初は、芝知晴という人物の証言だった。

「泉舞さん、こんなの使ったって、結局、意味がなかつたですね。」

杉嶋がつぶやいた。

「杉嶋君、この事件も、どーやら、解決したようだよ。」

「えっ?」

「えー、皆さん、いやー、本当に。私、必要ありませんでした。なぜなら、今回の犯人、すべて、このボイスレコーダーに向かって、犯行を自供しているんです。はい。ここは、ココアで一服・・・じゃなくて、泉舞君ではなく、杉嶋君に、美味しいところを持たせてあげましょう。というわけで、私は、これで失礼します。古畠直定朗でした。へへへ。」

解決

午前3:00。杉嶋は、芝知晴の自宅にいた。

「何ですか？こんな時間に。」

「芝さん、実は、先ほどの殺人事件の犯人が分かりました。」

「はあ？で、誰だったの？」

「犯人は、あなたです。」

「はあ？意味わからんねーし。証拠は？」

「これです。」

ボイスレコーダーをつけた。

泉舞「あー、すいません。警察です。はい。えーと、まず、お名前は？」

芝知晴「はあ？ってか何？殺人事件でもあったわけ？」

泉舞「よくご存じで。その通り。殺人です。あっ、僕、担当の泉舞と申します。」

芝知晴「マジで？大変だね。俺は、芝知晴。このドラマの犯人役。」

泉舞「あー、ドラマの撮影なんですね。で、知晴さんは、事件のあった時、何を？」

芝知晴「あー、着替えてましたよ。」

泉舞「そーですか。なんか、物音とか、聞きました？」

芝知晴「いやー、特に聞きませんでしたけどね。」

泉舞「そーですか。じゃあ、また何か気づいたこととかありましたら、教えてください。」

芝知晴「わかりました。あっ、でも、この後、用事あるんで。」

泉舞「あっ、そーですか。まあ、もう大丈夫だと思いますので。ハハハ。」

芝知晴「そーですか。ありがとうございます。」

「おわかりですか？芝さん。」

「わからんねーし。どこが、犯人って証拠なんだよ！」

「まず、あなたは、警察が来て、すぐに、殺人事件だと推測しました。そして、事件があった時、何を？と聞かれ、あなたは、着替えをしていたと答えました。そして、何か、物音を聞かなかつたか？と聞かれ、あなたは、特に聞きませんでしたと答えました。」

「普通にこたえてるだけじゃん!!何が、おかしいわけ？」

「なぜ、殺人事件だと言っただけなのに、事件が起きた時間を知っていたのですか？そして、現場も、まだ言っていないのに、あなたは、あたかも、現場を知っていた。だから、物音がしなかつたと答えられた。おかしくないですか？」

「・・・そ、それは・・・。」

「芝さん。答えてください。どうしてなんですか!!」

「あーあー、わかったよ。犯人は、俺。俺がやったんだよ。」

「なぜ。」

「石田と松枝は、大学時代の同級生でな、本当は、俺と結婚する予定だったんだ。だけど、いつの間にか、石田とくっつきやがって。」

すると、そこへ、松枝がやってきた。

「知君、そんな風に思っててくれたんだ。」

「・・・松枝。」

「でもね、本当は、私も知君の事、好きだった。でも、知君・・・いつも、ニンニク臭くて。」

「えっ？」

「私、匂いフェチで。知君の匂いが、ダメでね。それで、石田君に切り替えたの。」

「・・・マジかよ。」

そして、杉嶋が、

「では、行きましょう。芝知晴さん。」

「欲張りなのはいけないですね。刑事さん。」

「ええ。その通りです。」

2006年12月31日

三楽亭 田嶋

古畠直定朗4~ある俳優の憂鬱~

<http://p.booklog.jp/book/27109>

著者：三楽亭 田嶋

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/sanrakutei/profile>

発行所：ブクログのパブー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社paperboy&co.

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/27109>

ブクログのパブー本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/27109>